

平成 27 年 8 月 23 日

太平洋戦争で向き合った

佐賀藩英語塾「致遠館」校長ギド・フルベッキ先生と教え子江副廉蔵の子孫

早稲田大学百周年史の記述では、<フルベッキなくして大隈なし、大隈なくして早稲田大学なし>としてフルベッキを建学の祖の一人と認めている。

オランダ生まれのフルベッキは渡米後、宣教師となり 1859 年に来日した。然し当時の長崎では開国後もキリシタン禁制であり宣教師活動ができず、フルベッキは私塾で英語などを教えながら生計を立てていた。1861～1862 年ころには佐賀藩藩士であった副島種臣と大隈重信もフルベッキから英語の講義を受け、教材にバイブルやジェファーソンの米合衆国独立宣言文を使用したようで、大隈は後刻キリスト教に興味を抱いたと述べている。

1863 年の生麦事件とそれに続く薩英戦争を避け上海に避難していたフルベッキは翌年長崎に戻る。同年（元治元年）幕府設立の長崎英語伝習所「済美館」の英語教師に招請され、此処からは多くの人材が巣立っている。1865 年佐賀藩は藩内では設立に抵抗があった洋学派のために、長崎に副島種臣教頭、大隈重信補佐を以って「致遠館」を設立した。

フルベッキと親交があった佐賀藩前藩主・鍋島直正はフルベッキを雇用、英語、政治、経済に加えオランダで工科学校を出た経歴から工学も教えた。その生徒の一人が江副廉蔵であり、その孫が本日お話しする太平洋戦争末期の学徒出陣兵・江副隆愛である。

1869 年、フルベッキは明治政府から法律改革の顧問と大学設立協力など教育改革の要請を請け上京した。旧幕府開成所（開成学校）教師を務めながら大学南校と改称して教頭を任じ授業内容の変革、充実に努めた。

1868 年 6 月、フルベッキは大隈重信に「日本の近代化についてのブリーフ・スケッチ」を進講したが、大隈はこの文章を翻訳して岩倉具視に見せ、1871 年 11 月の欧米使節団「岩倉使節団」の派遣に繋がったことは良く知られている。1877 年官職を退き、同年には政府から勲三等旭日章を授与されている。

政府との雇用契約終了後はかねてからの希望どおり宣教師の活動に戻り、1886 年明治学院開学、1888 年には理事長となる。1898 年 3 月赤坂葵町にて逝去、明治天皇の厚意により葬儀は国葬に近いレベルで執り行われ青山墓地に埋葬された。

フルベッキは 7 男 4 女をもうけたが、子弟の教育は米国で行う考えから長崎生まれの長男ウイリアムを 17 歳でカリフォルニアに送り出した。彼は軍隊勤務、事業の変遷を重ねながらやがてニューヨークに移り、セントジョーンズ・マンリアス・ミリタリー・スクール校長となり結婚して 3 人の息子をもうけるがこの内の一人、三男ウイリアム・ジョーダンが太平洋戦争に出征し日本軍と闘うことになる。

武蔵野稲門会 諸江昭雄会長 講演資料(2015/8/23 納涼会)
 「大隈重信と人間模様 PART2」
 ～太平洋戦争で向き合った、佐賀藩英語塾「致遠館」
 校長・フルベッキ先生と教え子江副廉蔵の子孫～

「致遠館」教師 ギド・フルベッキ、大隈重信と 江副廉蔵
 佐賀藩

